

# デジタル時代における 著作物の利用円滑化方策について

2020年10月8日

内閣府 知的財産戦略推進事務局

## デジタル時代における著作物の利用円滑化方策について(案)

---

### ◆背景

- デジタル化に伴う著作物の創作及び利用規模の拡大により、UGC(ユーザ生成コンテンツ)の作品等を中心に著作物管理や権利者把握の負担が増大。孤児著作物も増大。
- 明示的な許諾がなくても、必ずしも権利侵害にあたらなかったり、刑事罰の対象にならない場合もあるのではないかとの問題提起(黙示の許諾の推定、コミケ等における二次創作活動等については非親告罪化の対象外)。
- 分野によっては技術や管理事業者による集中管理やライセンス体制が未成熟。

### ◆基本的な考え方

- デジタル化に伴うニーズを踏まえて具体的な課題を特定し、「権利処理の円滑化」と「権利保護・権利者への対価還元」のバランスの取れた手法(技術・契約・制度など)を検討することが必要。
- 短期的な取組に加えて、中長期的(今後5～10年程度)な将来像を見据えた議論も必要。
- 当事者間におけるライセンス体制の構築を促しつつ、デジタルイノベーションが活性化する利用円滑化方策を講じる必要がある。
- 効率的なライセンス体制の構築に当たっては技術を活用することが重要。

# 権利処理の手法類型とその特徴

|           | 排他的許諾権                                                                                              | 裁定制度                                                                                                                                           | 権利の集中管理                                                                                                                                         | 拡大集中許諾                                                                                                                                                                  | 報酬請求権<br>補償金付権利制限                                                                                                                                                                           | 権利制限(補償金なし)                                                                                                                         |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入例       | 原則                                                                                                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・権利者不明等の場合の利用</li> <li>・放送(実績なし)</li> <li>・商業用レコードへの録音等(実績なし)</li> </ul>                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>・楽曲</li> <li>・脚本</li> <li>・レコード</li> <li>・実演 等</li> </ul>                                                | <p>—</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>※北欧では導入例あり</li> <li>※イギリスでは、制度を導入したが未実施(団体なし)</li> </ul>                                                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>・私的録音録画</li> <li>・教育目的利用(公衆送信)</li> <li>・教科用図書への掲載</li> <li>・レコードの放送における二次使用</li> <li>・レコードの貸与(レンタル) 等</li> </ul>                                    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・私的使用のための複製</li> <li>・引用</li> <li>・教育(複製等)</li> <li>・柔軟な権利制限規定</li> <li>・非営利上演等 等</li> </ul> |
| 特徴        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・権利者の権利保護・意思の尊重(差止請求権の行使が可能、刑事罰の対象)</li> </ul>               | <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化庁長官の裁定により個別許諾を代替</li> <li>・補償金の供託による対価の保障(一部供託免除あり)</li> <li>・文化庁長官が補償金の額を定める</li> </ul>             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・権利者の任意による委託・信託</li> <li>・大量かつ定型的処理による取引費用の低減</li> <li>・団体が使用料規程を定め(利用者側への意見聴取・協議あり)、文化庁長官へ届出</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・集中管理団体と利用者との利用許諾契約と同条件での利用を非構成員の著作物等について認める制度</li> <li>・団体管理外のノンメンバーも含めた定型的処理による取引費用の低減</li> </ul>                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・円滑な利用を可能としつつ、権利者に一定の対価を還元</li> <li>・利用条件や補償金スキームなどについてきめ細かな対応が可能</li> <li>・団体指定への一括した補償金支払いの場合もあり</li> <li>・文化庁長官が補償金の額を定めたり、認可したりする場合あり</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・無許諾無償利用</li> <li>・権利者への影響が特段ない又は軽微な場合や、極めて公益性の高い場合等に対応</li> </ul>                           |
| 論点        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・右の各制度等と相まって権利の実質的範囲が確定</li> </ul>                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化庁長官が要件の充足性や補償金額の適正性を判断する必要があるため、一定の手続・期間を要する</li> <li>・実際に権利者が現れて供託された補償金を受け取った例は把握されていない</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・分野ごとの集中管理度合いにバラツキあり</li> <li>・ノンメンバーの著作物等には効果が及ばない</li> </ul>                                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ノンメンバーの権利を集中管理団体が処分することを正当化できるロジックが必要</li> <li>・日本では導入の前提となる集中管理が未発達(少数の権利者による団体が、その他多数の権利者の権利を処分することを正当化できるロジックが必要)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・差止請求権なし</li> </ul>                                                                                                                                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・差止請求権なし</li> <li>・権利者への対価還元なし</li> </ul>                                                    |
| 権利者の意思の尊重 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・権利を行使しなかったり、クリエイティブコモンズ等による権利放棄の意思表示を行ったりすることは可能</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>一部可能(制度設計次第)</li> </ul>                                                                                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>可能(権利者の意思を尊重)</li> </ul>                                                                                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・制度設計次第</li> </ul>                                                                                                               | <ul style="list-style-type: none"> <li>・制度設計次第</li> </ul>                                                                                                                                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・制度設計次第</li> </ul>                                                                           |

---

## ◆その他の利用円滑化方策や補完手段

- 混合型(集中管理団体のメンバーは集中管理、ノンメンバーは補償金付権利制限とした上で団体指定による一括支払い 等)
- 技術による管理(フィンガープリントを用いた無許諾コンテンツの追跡・削除・収益化やブロックチェーンを用いた著作権管理プラットフォームの構築等)
- 許諾の推定
- 裁定や登録の申請手続の電子化

## ◆利用円滑化の必要性が指摘される場面の例

- ユーザー投稿型プラットフォームにおける利用
- 放送番組等の配信(過去作品を含む)
- 一斉同時型配信におけるレコードの利用
- 図書館等が保有する資料等へのアクセス
- その他

## ◆その他の論点案

- 海外展開の円滑化
- 契約の電子化等、取引環境の適正化
- 「万人の法」としての分かりやすさの追求

## 【参考】著作権者等が不明の場合の文化庁長官の裁定制度の概要

相当な努力(※1)をしても権利者が誰か分からない、(権利者が誰か分かったとしても)権利者がどこにいるのか分からない、亡くなった権利者の相続人が誰でどこにいるのか分からないなどの理由で許諾を得ることができない場合に、権利者の許諾を得る代わりに文化庁長官の裁定を受け、通常の使用料額に相当する補償金を供託(※2)することにより、適法に利用することができる制度。

### ※1 「相当な努力」

#### ① 次のいずれかを実施

ア) 権利者の名前や住所等が掲載されている名簿・名鑑等の閲覧

イ) ネット検索サービスによる情報の検索

ウ) 過去に裁定を受けた著作物等に関するデータベースの閲覧

#### ② 著作権等管理事業者、利用しようとする著作物等の分野に係る著作者団体等、過去に裁定を受けた著作物等に関するデータベースを保有する文化庁への照会

#### ③ 下記のいずれかの方法で、公衆に対し広く権利者情報の提供を求める

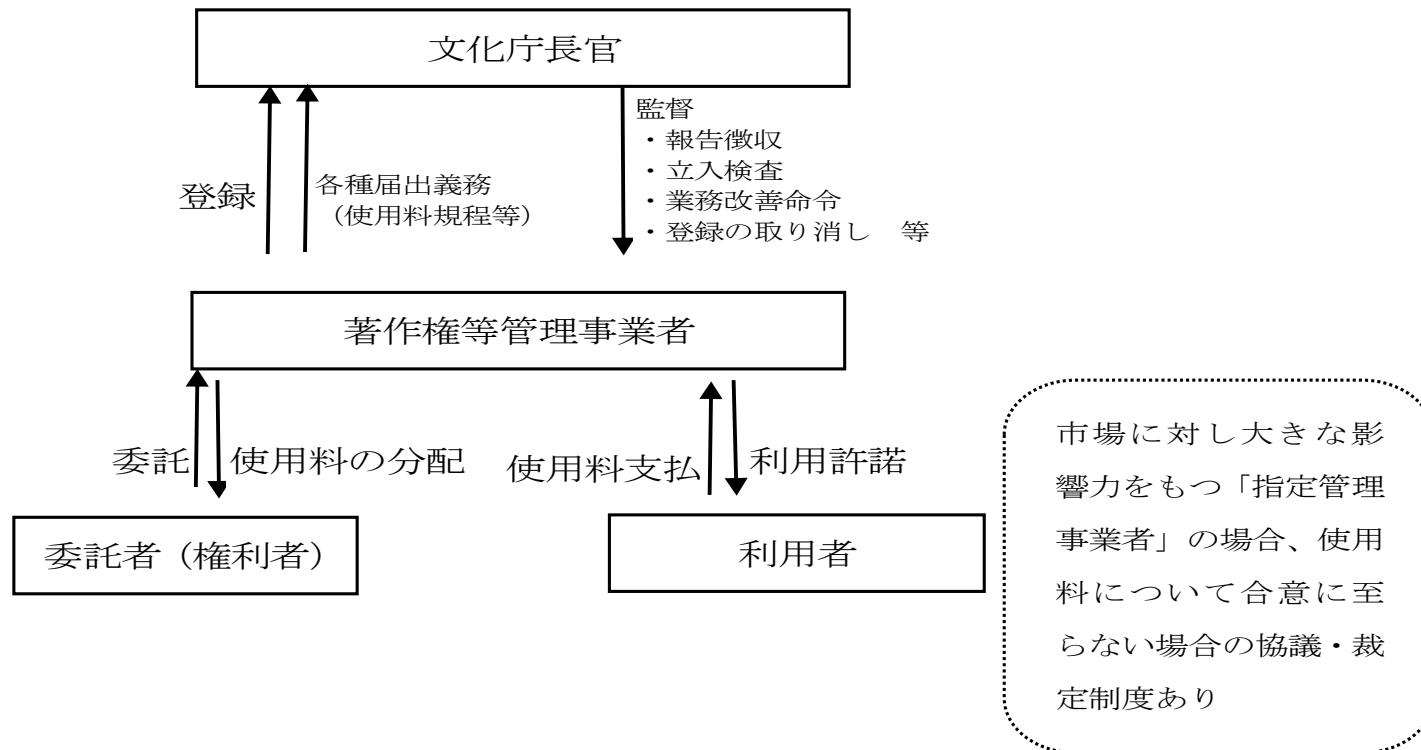
・日刊新聞紙への掲載

・著作権情報センター(CRIC)のウェブサイト掲載

※2 平成31年1月より、国や地方公共団体、NHK等については、補償金の事前供託は免除され、権利者が現れた場合に、文化庁長官が定める額の補償金を直接権利者に支払うことが可能になった。

## 【参考】著作権等管理事業者の概要

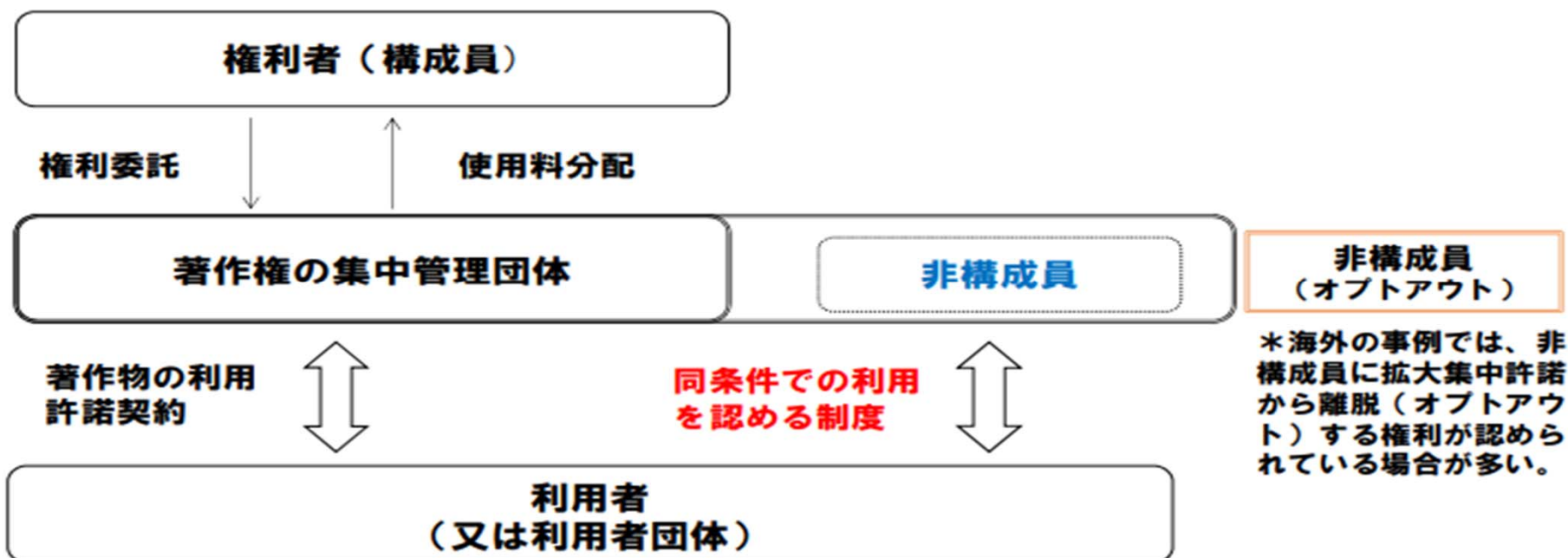
- ◆ JASRAC（日本音楽著作権協会）、日本レコード協会、日本複製権センター、日本文藝家協会などの「著作権等管理事業者」が、著作権等管理事業法に基づき、著作権者等から委託を受けて、著作物の許諾の窓口として機能。
- ◆ 利用者は、予め定められた使用料（使用料規程に上限の定めあり）を管理事業者に支払えば、原則許諾を得ることができる。（著作権等管理事業者の応諾義務）



## 【参考】拡大集中許諾制度の概要

○法律に基づき、集中管理団体の構成員ではない著作権者の著作物について、相当数の著作権者を代表する「集中管理団体」と著作物の「利用者」との間で締結された、著作物の利用許諾契約と同じ利用条件で、利用することを認める制度。北欧等で導入されている。

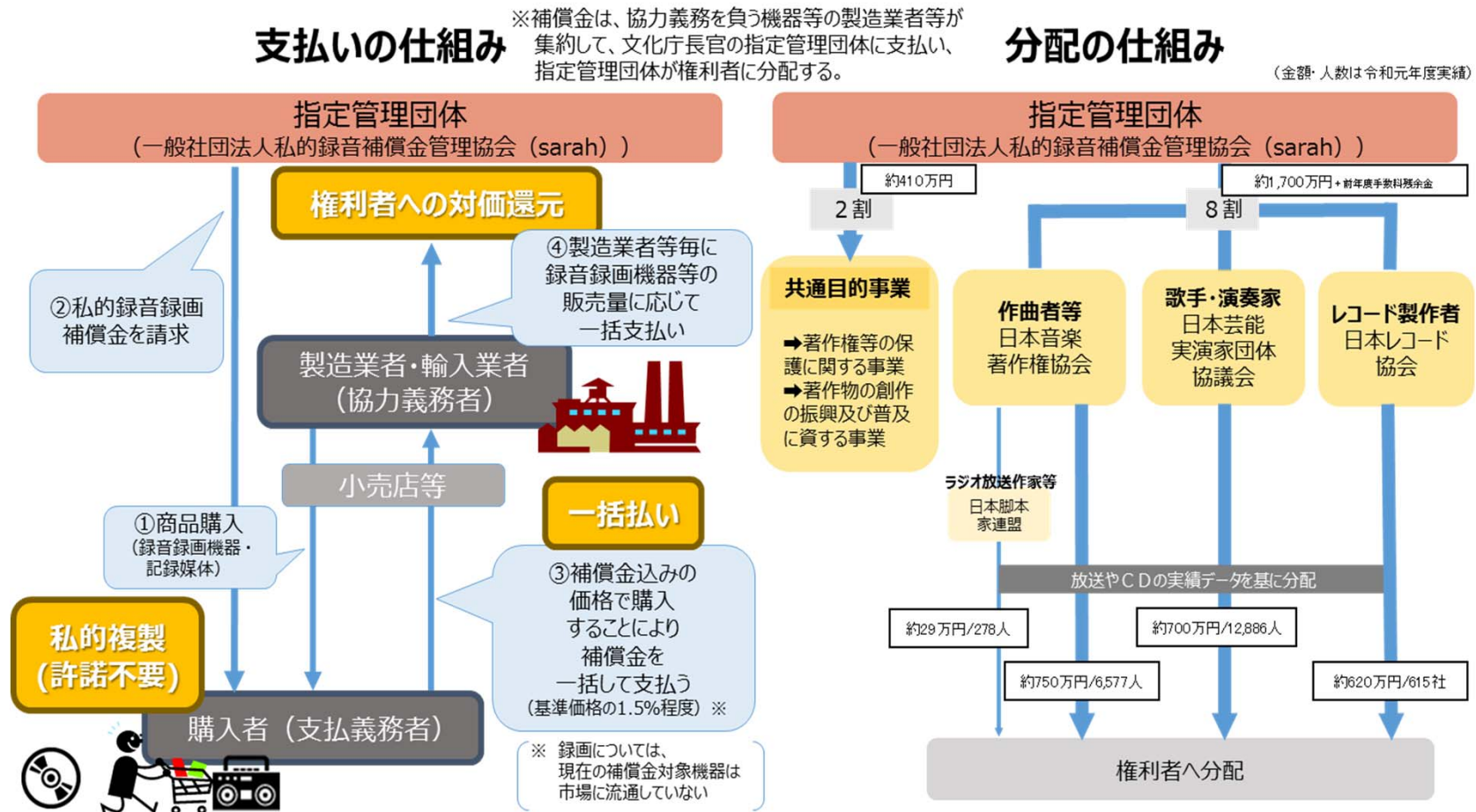
○本制度導入に当たっては、法的な正当化根拠のほか、拡大集中許諾団体の在り方等、多様な課題があることが指摘されていることから、補償金請求権を伴う権利制限、報酬請求権、裁定制度、ライセンス優先型権利制限などの著作物の流通促進を図る他の制度にも留意しながら検討をする必要がある。



# 【参考】私的録音録画補償金制度の概要

デジタル方式の私的使用のための録音・録画について、権利者の利益を保護するため、録音・録画を行う利用者が録音・録画機器や記録媒体の価格に上乗せされた補償金を支払う制度。

\*【趣旨】録音・録画技術の発達普及により、録音・録画が家庭内において容易に行われるようになり、その結果として、社会全体として大量の録音・録画物が作成される事態に至っていることから、利用者が録音・録画機器等の購入時に補償金額を一括払いするとの簡便な方法により、「私的複製（許諾不要）」と「権利者への対価還元」のバランスを実現





## 【参考】授業目的公衆送信補償金制度の概要

○学校等のオンライン教育を推進するため、平成30年の著作権法改正により、授業の過程における著作物の公衆送信について、従来は個別の許諾が必要であったものを、教育機関の設置者が文化庁の指定する権利者団体（指定管理団体）に一括して補償金を支払うことで、無許諾で可能とした。

○新型コロナウイルス感染症の流行に伴う教育現場のニーズ等に対応するため、当初の予定を早め、令和2年4月28日から施行。また、令和2年度に限り、補償金は特例的に無償。

○令和3年度からの有償での本格実施に向けて、指定管理団体の申請した補償金額の認可の可否の決定を行うことに併せ、補償金負担の軽減のための必要な支援について検討中。

